

HAPPY RUNNING STORY

武藤 彰

さん

(71歳)

岐阜県

「マラソンで地球を駆け抜け、青春を謳歌」 北極圏と世界8大陸の フルマラソンを制覇

北は北極圏、南は南極大陸。世界各地、地球規模でフルマラソンを走ることによって感じてきた価値観や生きがい。日本初、日本三霊山を海拔ゼロから登頂を果たしギネスに登録。71歳の今も、挑戦を続けることで青春を謳歌する武藤彰さんがマラソン人生の日々を綴る。

●プロフィール
1941年石川県金沢市生まれ。岐阜県羽島市在住。走歴38年。44歳の時、ホノルルマラソンでフルマラソンデビュー。世界各国の大会を走り、2011年に世界8大陸のフルマラソン完走を達成。フルマラソンのベストは1991年の河口湖マラソンの3時間20分50秒。フル百回走会に所属。地元では、ぎふ長良川走ろう会、犬山走友会で活動

大学卒業後、大阪の電機メーカーのエンジニアとして就職。カラーテレビの開発、設計にひたすら打ち込む日々の中で、ストレス発散や健康のためにという軽い気持ちで走り始めたのが40年ほど前のこと。それ以来ランニングにのめり込み、初めてのフルマラソンは85年のホノルルマラソン。海外旅行も初めてでしたので「ランナイズ」のマラソンツアーのお世話になりました。コースは変化に富んでいて景色も絶好。序盤はキロ6分のペースで快調に飛ばしていましたが、さすが28℃の暑さにはこらえられず35km過ぎにはお腹も空いてきて歩きも入りましたが、執念で4時間43秒20秒で完走。ゴール後は感動の涙が止まりませんでした。

このとき、人々が英語で楽しそうに話しているのを見て英会話の大切さも知り、帰国後はラジオで英会話を必死で勉強し、身に付けました。それ以来、一層フルマラソンの魅力にとりつかれ、いつのまにか走ることに生きがいとなり、世界中延べ57カ国を訪れ、33の大会に参加してきました。パリ、サンパウロ、ボストン、ロンドン、マドリッド、バンコク、ニューゼーランド。思い出深いのは、96年4月15日の第100回ボストンマラソンを走った6日後に、そのナンバーカードを背に付けてロンドンマラソンを走ったこと。周りのランナーが「You are great! Good job!」と声をかけてくれました。この旅は、勤続30周年の特別休暇を利用した世界一周ひとり旅でした。2001年のアメリカ同時多発テロの直後には、ワシントンD.C.のマリンコープスマラソン、ニューヨークシティマラソンにも参加しました。

この間も、国内では、さくら道ウルトラ遠足で、2ステージには分けましたが、今住んでいる岐阜の地から、生まれ故郷の金沢まで270kmを49時間かけて走ったこと。サロマ湖、野辺山、四万十川などのウルトラマラソンを21回走ったことなどが走馬灯のように思い出されます。そして、2001年2月、南極マラソンを完走し、念願の世界7大陸のフルマラソン制覇を達成。一緒に走り続けてきた仲間たちにも祝福され、本当に走り続けてきて良かったと実感しました。南極マラソンでは、集まった多くの海外の冒険ランナーたちと出会い、彼らの気力、情熱、ユーモアなどがまるで違うことを実感させられました。アメリカから来ていた女性も含めた数人のランナーたちは流水の浮かぶ極寒の海に飛び込み楽しそうに泳いでいました。サハラ砂漠やシルクロードを走破してきたヨーロッパ人ランナーも。

自力本願で自由に生きる

2010年6月には、走り始めて累計で地球2周8万kmのゴールを北極圏・トロムソのミッドナイトサンマラソンで踏むことができました。この時期、北極圏トロムソでは24時間太陽は沈まず、白夜のもと、真夜中に42・195kmを走りました。一度しかないこの人生、ああすれば良かった、こうすれば良かったと、後悔だけはしないように好きなことをしたい。今の小さな豊かさに慣れず、より大きな目標や夢を持ち、生きがいを求めて走り続けよう。自己責任、自力本願で自由に生きたい。定年退職して早12年、我がマラソン人生を謳歌、適進しています。2011年、アジア大陸をスタートし、ヨーロッパ大陸にゴールするユーラシア大陸マラソンを完走し、世界8大陸(※)のフルマラソンを制覇しました。これまでアクシデントもありました。サントベテルブルクではカメラ撮影に夢中になっていたところ、

※世界8大陸……アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア、南極の世界7大陸に、ユーラシア（アジアとヨーロッパを合わせた呼称）を加え8大陸

道路上に置いていたバッグを盗まれてしまいいカードから財布まで盗まれてしまうアクシデント。お金がなくなったので最後の夜はモスクワ空港で1夜を明かすことになりました。楽しい思い出もあります。トルコの Cappadocia では、ひとり旅の韓国の可愛い女の子とお互いの身の上話などに花が咲き意気投合。またイスタンブールでも可愛いロシアの女の子と知り合い、忘れられない思い出です。

自己挑戦でギネス認定

大会以外でも個人的なチャレンジも続けました。富士山、立山、白山の日本三霊山を、海拔ゼロメートルから山頂まで登りました。まず19

世界8大陸制覇以外にも、47都道府県制覇、中山道69次570km完全制覇など、これまでの挑戦の履歴は多岐に渡る。写真は、2010年6月北極圏のミッドナイトサンマラソン。



98年、標高3776mの富士山山頂までは、駿河湾田子の浦海岸から距離58km、14時間以上かけて登りました。2002年には、富山湾黒崎海岸から越中山山頂上までは標高差3000m、距離63km、所要時間11時間以上。その翌月には、石川県の安宅海岸から加賀白山山頂まで、標高差2700m、距離76kmを14時間以上かけて登りました。この記録は「ジャパン・ギネス・サービス」の「何でも日本一」のサイトにて、日本人初の記録であると認定され、またギネス社に世界初の記録申請をしてギネスのデータベースにも登録され、世界初と認定されました。

走ることは、私自身を肉体的にも精神的にも180度変えました。肉体的に強くなり、若がり、少しくらい風邪を引いても回復が早くなりました。ランニング友だちも増え、時に飲み過ぎてしまうこともありましたが、充実した日々です。マラソンを通じて海外で様々な体験をしたことで、自力本願の精神を心に留め、気づいたら即行動するように心がけています。また、いつも好奇心を持ち、感動することを忘れないように生活しています。

走友と行く海外貧乏ツアー

9年ほど前、ある走友から「おみやーさん、世界中を安く、楽しそう

に旅しているそうだがや、一度我々も連れてつてくりやー」と頼まれました。私の海外マラソン旅のスタイルといえば、バックパックを背負い、ユースホステルの2段ベッドの安宿などを転々と泊まり歩いて、得意の英語を駆使して放浪の旅を続けるというスタイルでしたので、貧乏ツアーならどこでも連れて行く自信がありました。それまでの経験で、その時世界中で一番素晴らしいところはスイスだと思っていたので、

「2段ベッドの安宿に泊まり、食事は自炊かユースホステルの食事を食べます。また、連れて行ってもらおうという考えではなく、自力本願、自己責任の精神で自分自身で考えて行動できるなら一緒に行きましょう」と答え、2004年に総勢27名でスイスに行きました。世界で一番美しいユングフラウマラソンを走った後、ヨーロッパアルプス3大名峰のアイガー、マッターホルン、モンブランを周遊し、山岳ホテルにも泊まりました。参加の皆さんは、素晴らしい！と大変感動され、口コミでその素晴らしさを聞いた他の走友たちから、「私も連れてつてちょー！」ということで再び翌2005年、25名を連れ同じコースでスイスを巡りました。それ以来、皆さんから次はどこ、いつ行くの？との催促で、毎年

できました。私が呼びかけるツアーは、バックケージツアーのように豪華なホテルやグルメ、ブランドショッピングなどはありませんが、現地の人たちと交流し、その土地の風土や習慣、文化、生活に直接触れる旅です。また、参加の皆さんが自ら、誘導や会計、点呼などを分担し、全員チームワークよく楽しい旅になるよう協力しています。

夢を持ち続けて青春を謳歌

今年5月には、ボルネオ島、コタキナバル・赤道マラソンで400回目のフルマラソン完走に挑戦します。フルマラソンを走り始めたころは、サブスリーを目指してトレーニングを重ねる毎日でしたが、その後はウルトラマラソンへの挑戦、今は志を高く持ち、健康の続く限り走り続けるつもりです。400回は単なる通過点にすぎません。80歳までにフルマラソンを500回、90歳までにフルマラソンを600回完走することが目標です。

青春とは心の若さである——。心に夢を持ち、目標、希望を持って生きれば、いつまでも若さを保つことができるかと信じています。まだまだこのマラソン人生、捨てたものではありません。

夢持てば人は輝くいつまでも、夢は夢呼ぶ走る喜び。

投稿・推薦
大募集

本欄のテーマはマラソン・100km初完走、自己ベスト達成、ケガや病氣克服など、ご自身のランニングライフでエポックメイキングなことなら、なんでも構いません。3000字程度にまとめて原稿をお送りください(多少の添削はご容赦願います)。できれば文章と関連のある写真も一緒にお送りください。掲載された方には1万円分の図書カードと8000円相当のランナーズオリジナルグッズを進呈させていただきます。